

# 旅と地域の研究会 (たび研)

中山昭則

Akinori NAKAYAMA

## 1. たび研の現況

旅と地域の研究会(たび研)は2016年2月現在、12名の学生が所属している。学年の内訳は4年生が2名(2015年4月で活動からは退いている)、3年生1名、2年生4名、1年生5名となっている。5名の有望な1年生が入会し後述の通り既に第一線で活躍している。また、男女の内訳は男子会員3名、女子会員9名と女性の数が圧倒している。

たび研の活動は、前号でも紹介した通りこの数年は顧問中山が受けている受託研究の補助を中心に行ってきたが、2015年度は受託研究にめどがついたこともあり、久しぶりにオリジナル研究を実践した。その上、今年度の前期は「大学生観光まちづくりコンテスト」に参加したためその準備に追われたので、オリジナル研究を本格的に始めたのは後期になってからである。

それでは、2015年度の活動について報告する。

## 2. 見事本選出場を果たした「大学生観光まちづくりコンテスト」

たび研は標記のコンテストに初めて出場した。この催しはわが国が推進する「観光立国」を担う人材育成を図るとともに、“アクティブラーニング”の重要性の高まりを受けて、大学生の実践教育の場の提供という目的も兼ねて、2013年度から全国3会場(青森県、山梨県、大阪府)で開催されてきた。今年度は大分ステージもこれに加わった。主催は各会場のコンテスト運営協議会であるが、観光庁、文部科学省、総務省が後援し、運営はJTBが執り行なった。顧問中山は大分ステージのコンテスト運営協議会の一員として大会にかかわった。

大会はまず6月末締め切りの参加申し込みを受けて、参加校が出席する説明会が6月29日に別府市ビーコンプラザで行われた。そこで8月26日の企画書提出締め切りまでの調査方法等に関するレクチャーを受け、参加大学生によるディスカッションも行われた。



企画プラン提出に向けて



さて、8月下旬までのおよそ2か月間が準備期間となるが、現地調査の実施が義務付けられている。現地調査は当研究室の得意とするところで、学生たちも自信を持って臨むことができた。

8月26日締め切りのプラン提出をもって正式エントリーとなる。たび研からは2年生チーム「〇〇したくなる”ぶんごおの～若者さんいらっしゃい!!～」、1・3年生チーム「セルフイーる杵築～きものde自撮り作戦～」の



FW 豊後大野市



FW 杵築市

2チームがエントリーした。

その後提出プランの一次選考（書類審査）が行われ、選ばれた10チームが9月10日の本選に進む。選考の結果1・3年生チームが見事本選出場を果たした。2年生チームをはじめとする惜しくも本選出場ならなかったチームも本選当日ポスターセッションという形で参加することになった。

一次選考の結果を受けて、9月に入るとプレゼンテーションの準備が本格化した。学生たちは何度も原稿を書き直しながら四苦八苦し。

いよいよ2015年9月10日（木）は本選の当日である。会場はJR大分駅前の「ホルトホール大分」。本選には本チームの他、立命館アジア太平洋大学、明治大学（2チーム）、お茶の水

女子大学、北九州市立大学、跡見学園女子大学、県立広島大学、佐賀大学、久留米工業大学が進出を果たしている。プレゼンテーションの順番は当日抽選で決まるのだが、そこで主催者側の運営に多少の齟齬が生じ（抽選開始のアナウンスが無いまま早い者順で抽選が行われた）、残りくじが2本しかない中、代表の豊東千佳さんが引いた順番は何とトップバッターであった。発表時間まで僅か20分しかない。緊張する間もなく慌ただしく登壇したというのが実情である。

結果入選はならなかったが、全国区の有力大学と互角に渡り合えたことは大きな収穫となった。



本選当日の朝 最後の打ち合わせ



頑張るぞー



いよいよ開会セレモニー



ここから厳しい質問も出る!! 審査員席



緊張しながらの発表



一方、ポスターセッションで発表した2年生チームも堂々とプレゼンテーションをこなし好評を博した。

今回のコンテスト参加は、たび研にとっては

画期的な経験となった。学生だけは研究室活動で進めてきた手法はある程度全国でも通用することを知り、自信を深めるとともに、課題も見出すことができた。



ポスターセッションの様子



趣向を凝らしたプレゼンテーション



\*注) 写真のメンバーは全て2015年8～9月当時のものです

### 3. オリジナル研究『おみやげの謎』

今年度久しぶりにオリジナル研究を実践することができた。コンテストも終わり後期になっ

て「さて、何をしようか」という話し合いの席上誰となく「お土産って面白そうだね」という声があがり「では、それで行きましょう」ということになった。このような決まり方だったので不安もあったが、今回は室員も粒ぞろいな

で、きちんと手順を踏むことにした。まず、先行文献を探し、その中から鍛冶博之(2006)氏の「観光学の中の土産物研究」(社会科学77, 45-70, 同志社大学)を全員で輪読した。その結果、「レールもの」と言われる「所謂パッケージは違っても中身は一緒の土産」が問題意識としてあがった。さらに「お土産物を分類してみる必要がある」ということにもなった。これらの課題に2チームで取り組むことにした。

「レールものチーム」は、先行研究から「レールもの」を自分たちで定義づけし、実際に見てみることになり、別府市と大分市の百貨店やお土産物売り場でその実情を観察した。

「分類チーム」は、先行研究からお土産物の購入動機を分類した。そして、実際に大分県の土産菓子を購入動機別に分類してみた。

調査の中間報告として2016年2月6日に報告をしたが、調査・研究はこれからも続く。

#### 4. 日田市受託研究「**広瀬旭 荘日記『日間些事備忘録』 の歴史地理的研究**」

報告者が取り組んできた日田市の受託研究も本年度で4年目を迎えた。これまで岡山県津山市、山口県～香川県の瀬戸内地方、岡山市～大阪市の山陽道と、広瀬旭荘の足跡を辿るFWを重ねてきた。今年は足を延ばして栃木県足利市の「足利学校」と日光市の「日光東照宮」を訪問した。旭荘はこれまでの調査地ほど詳細な記録を残しているわけではないが、訪ねた最北の地であり咸宜園同様教育施設の史跡ということで足利を訪ねた。彼は東照宮にも足跡を残し記録にとどめている。

今回のFWには熱心な2年生室員4名(津

野友香、佐藤萌美、本田悠、後藤航)が同行した。学生たちにとっては分野の違う歴史地理的な調査であり、旭荘が残した地名や記録をずっと追っていくというとても地味な調査である。学生たちは筆者と日田市担当者の調査を熱心に見つめていた。また、足利市職員と夕食を共にし地方公務員の仕事についても説明を受けていた。

#### 5. おわりに～今後の展望～

たび研は今一つのピークを迎えているのではない。陣容の質と量ともに充実している。これからもこの環境を活かした研究活動を行っていききたい。主力の2年生は今回の足利FWを経て益々充実していくことだろう。この学生達のスキルを最大限伸ばすことが顧問に課せられた最重要課題と考えている。学生たちは3年から専門ゼミに配属される。中山ゼミに入る学生は1名だけである。他の3名は各々関心のある分野のゼミに入る。これもたび研の方針通りで、ここは中山専門ゼミへの登竜門ではないのだ。5名の1年生も先輩たちの背中を追っている。人間関係に円熟味が加われば2年生と肩を並べる日も遠くはあるまい。

さて、今後の展望であるが、地域のお宝について調査してほしいとの依頼も幾つか舞い込んで来ている。再び依頼調査が軸になるかもしれない。こうした調査依頼が大学に持ち込まれた時、たび研に話しが持ち込まれるということは大変喜ばしい限りである。

継続的な調査・研究を可能にするためには新入生の加入が欠かせない。新しい力を加えパワーアップさせて更なる高みを目指していかなければならない。